(2)父を反面教師に

幼い頃から加藤が話し相手としたのは、父信一であり母織子であった。政治的社会的事件やその動向についても、加藤は父信一から学んだ。加藤の家では、食後の団欒（だんらん）に、父信一が世の中に起きた事件について、何らかの意見を述べる習慣があった。

リットン調査団の報告書について、「大日本帝国の意図を歪めて解釈し、不当な圧迫を加えようとするものだ」と父信一はいい、国際連盟総会で松岡洋右代表が連盟脱退を告げて席を起った行動を「痛快この上もない」こととした。一方、美濃部達吉の天皇機関説が批判されると、「美濃部博士の議論が理路整然としているのにくらべて、攻撃側の議員のいうことは支離滅裂で、愚劣極まるものだ」といった。観兵式に代々木練兵場に出かけ「陛下」を仰ぎ見るほどに、天皇への「崇拝」の感情は強かった。一方で 2.26 事件直後のことになるが、斎藤隆夫の「粛軍演説」（1936 年 5 月）を激賞するのだった。

父信一は熱烈な愛国主義者ではあったが、さりとて狂信的ではなかった。なぜならば父信一が学んだ医学に基づく実証主義的な考え方に徹底していて、それがすべての「神がかり」を信じさせなかったからである。

このような父の意見を聴きながら、加藤はそれをどのように受けとめていたのだろうか。父信一の話すことによって事態が解明された、という実感を加藤はもつことはできなかった。

> あるときには、あまりに当然と思われ、あるときには、私とは別の時代に育った人の奇妙な感情的反応にすぎないと思われた。事件と事件との間の関係が、父の話を通じてあきらかになるということは、ほとんどなかった。(中略)明日がどうなるかわからぬとい

うことは、父の世界の本質そのものであった。(『羊の歌』「二・二六事件」)

加藤は父信一の専門領域における徹底した実証主義的・合理主義的な考え方が、専門外の世界ではまったく活きていないと考えた。これは父信一にのみいえることではなかった。1930 年代の日本の状況について「充分に考え抜いてはいなかった」と、日本の知識人に共通する弱点を見てとるのである。そのような判断をもつに至ったのは、加藤が父信一を反面教師にしたからだったといえるだろうか。

それでは加藤自身は、社会を、時代をどのように捉えていたのか、あるいは捉えようとしていたのか。父信一が事あるたびに話す意見のあいだに相互の関連性が見えないことに気づいていた。それゆえだろうか、加藤は「満洲事変以来の多くの現象の全体を、一つの方向への社会の発展として理解しようと試みた」(『羊の歌』「二・二六事件」)。ここにはのちに加藤の社会認識の基本になる全体的に理解しようとする方法を見ることができる。